



|              |                                                                             |
|--------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| Title        | カタロニア語における日本語からの借用語の発音に関する予備調査                                              |
| Author(s)    | 長谷川, 信弥                                                                     |
| Citation     | Estudios Hispánicos. 2020, 44, p. 1-10                                      |
| Version Type | VoR                                                                         |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/98047">https://doi.org/10.18910/98047</a> |
| rights       |                                                                             |
| Note         |                                                                             |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

(研究ノート)

## カタロニア語における日本語からの 借用語の発音に関する予備調査

長谷川 信 弥

### 0. 目的

本稿は、カタロニア語における日本語からの借用語の発音についておこなった予備的調査の報告である。近年の日本文化のなかで、アニメ、食文化、武道などの海外進出にみられる顕著な事象が、スペインの文化にも多く見られ、それにともない日本語からの借用語も増えている。これについて Freixa Aymerich (2019) は、近年の報道媒体における各言語からの借用語の数量的な研究から、アジアの諸言語のなかでもとくに日本語からの借用語は、食文化、アニメ (マンガ)、健康とならんで、東洋的な文化に対するエキゾチズムによる語彙の借用が増加の傾向にあること、これは国際化による借用語の受容とその定着が規範化の理念に反し増加傾向にあることを意味している、と結論づけている。そこで本稿では、こういった傾向のなかにある日本語からの借用語について、とくにその発音を調査する。特に今回は、語中の弱勢母音の弱化現象 (*reducció vocàlica*) について資料体を調べることにする。この弱化は、弱勢母音 a、e、o が弱化した発音、すなわち a と e は [ə]、o は [u] で調音される現象をいう。

### 1. 近年の借用語の傾向

前述のように Freixa Aymerich (2019) は、増加傾向にある報道媒体における借用語のなかでは、やはり英語からの借用が多く、スペイン語 (カステイリア語) からの借用の割合が低下していること、それ以外の言語では、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、ドイツ語からの借用は低下傾向にあり、イタリア語からは従前通りの傾向であると述べている。そして、さらにそれ以外の言語では、アラビア語と日本語からの借用が顕著であるとしている

が、両言語からの借用語の増加は、異なる理由によるものであり、アラビア語からの借用語の増加は移民による居住者の増加と一致していると断言している一方で、日本語からは東洋的な文化への言及に際する語彙の受容であるとだけ述べ、あまり明確な理由をあげてはいない。具体的に日本語からの借用語として以下の 15 語の語彙を年代とカテゴリーに言及しながら提示している<sup>1</sup>。

- (1) aikido (2000) 合気道
- (2) amigurumi (2011) あみぐるみ [マンガ文化] (手編みのぬいぐるみ)
- (3) anime (1996) アニメ [マンガ文化]
- (4) dorayaki (2012) どら焼き [食文化]
- (5) emoji (2014) 絵文字 (SNS 用語として借用されたもの)
- (6) manga (1993) 漫画 [マンガ文化]
- (7) ninja (1994) 忍者
- (8) origami (2007) 折り紙
- (9) reiki (1996) 霊気 [健康]
- (10) seitan (2004) グルテンミート [食文化]  
(代用肉としてのグルテン加工食品、スペイン語 *seitán*)
- (11) shiatsu (2015) 指圧 [健康]
- (12) sudoku (2005) 数独
- (13) sushi (1996) 寿司 [食文化]
- (14) tataki (2007) たたき [食文化]  
(かつおなどのたたきを示していると思われる)
- (15) umami (2011) うま味 [食文化]

これらの語彙のなかでも、やはり食文化に関するものが多いことがよくわかる。TERMCAT (カタルーニャ新語センター) の紹介する借用語のサイトにも日本食専用のページが開設されていることから、この種の語彙の流入とそれに対する関心の高さがうかがえる<sup>2</sup>。ちなみに、TERMCAT では上記のなかでは (13) のみがリストに掲載されており、(4)「どら焼き」、(14)

1 右のカッコ内は筆者のコメント。

2 以下のサイトで日本食の語彙が検索できる：  
<https://www.termcat.cat/ca/diccionaris-en-linia/33>

「たたき」、(15)「うま味」はあがっていない。

このように日本語からの借用語は、食文化、アニメ、武道など分野のかたよりはあるものの、一定量がカタロニア語に受容されており、それらの語彙の意味や綴りだけでなく、発音にも注視していく必要があるものと思われる。

## 2. 先行研究

借用語に関するさまざまな研究のなかでも、Paloma (2016) は、ラテン語およびイタリア語からカタロニア語への借用語における発音についての調査を報告しているもので、発音辞典 *Diccionari ortogràfic i de pronúncia* において、ラテン語表現の 88.2% (328 表現)、イタリア語表現の 43.6% (363 表現) が、母音 a、e、o が弱化した発音で記載されていることを報告している。さらに、ラテン語表現のなかでも弱化していないものも認められるが、その特徴として以下の 4 つをあげている。

- 1) 2 語以上の表現 (de facto、honoris causa など)
- 2) 語彙化した表現で、その一部が省略されているもの  
(recto、本来は folio recto など)
- 3) 動詞の活用形 (deleàtur など)
- 4) 宗教的意味を持つ表現

これらの特徴のなかでは、2) を除いて、日本語からの借用語の特徴としては該当しないと推測される。弱化が起こっているのは、1) カタロニア語の語彙として十分に認知されている語 (addenda、viceversa など)、2) a がひとつまたはふたつだけ弱勢位置にあり、残りの弱勢位置にある母音が i または u、つまり弱化の起こらないものであるとき (facsimil、factòtum [おせっかいやき]) で、逆に弱化が起こらないケースとしては、音楽用語、とくに速さに関するもの (allegro や andante など) という、語彙として分野のまとまりがあり、借用されてから一定の時間が経過し定着していると考えられるものであるとしている。

以上のことから考察できることは、弱化が起こっているものは、ラテン語でもイタリア語でも、借用された時期が古く、カタロニア語の語彙体系に十

分に組み入れられているといえるのではないかと考えられる。ただ、音楽用語のように、まとまったテーマの語彙が借用されている場合には弱化が起こっていないことは、さらなる分析が必要である。いずれにしても、日本語からの借用語については、上記 1) から 4) までの特徴は直接的な関連は薄いといえるが、定着の程度についての考察がなされていることは参考になると考えられる。

### 3. GCC、IEC

GCC (2002:927-930) は、借用語の受容される順序を記述している。それによると、従来の借用はその多くが文字体系によっておこなわれてきた、すなわち書記されたものが伝わり、それゆえにその発音はカタロニア語の体系で処理されてきた。例として、iceberg が [isaβérk] と取り入れられ、強勢位置もカタロニア語の規則に従ったものをあげている。さらに、文字体系の異なる言語からの借用の場合は、まずローマ字化された綴りが導入され、原語とは異なる発音、強勢位置で実現されてきた。しかし、近年では文字を通してではなく原音がそのまま伝わり、さまざまな結果をもたらしているとして、個々の音声変化を詳細に記述している。そのなかで日本語からの例は、Toyota「トヨタ自動車」があげられ、[tojóta] と [tujóta] の発音、つまり弱化の有無があるとしている。また、saque「酒」は [sáke] のみがあげられている。結論としては、近年の借用語は、原語の綴りだけでなく、音声も同時にたらされるため、カタロニア語固有の音声体系にはかなわない綴りと音声の関係が見られる傾向があるとしている。このように、GCC は借用語が多様な取り込み方をされていることを指摘しており、それぞれの場合に応じた、発音にしてみてもアドホックな結果が生じているとしている<sup>3</sup>。

規範的な立場から記述している IEC は、IEC (2016) および IEC (2019) において、GCC の記述と同様の認識を持ち、なおかつ、弱化が起こらないとされる例でも、定着するにつれて弱化が起こってくることが知られているとしている。このことは、IEC (2016:44) で次のように記述されている。

---

3 ここで取りあげられている Toyota の場合、2018 年以降のテレビコマーシャルで確認されるのは、その発音は上記の前者すなわち [tojóta] であり、弱化がおこらず、強勢位置はともかく、日本語の母音により近い、原語に従った発音である。

“... en els parlars orientals també hi ha una sèrie de casos que no venen determinats pel context morfològic o fonològic, sinó que són purament excepcions lèxiques. En aquests casos no hi ha reducció en [ə] o [u] i trobem una vocal mitjana tancada ([e] o [o]). Aquest comportament és típic de mots d'introducció més o menys recent i, per això, apareix generalment en manlleus, inclosos els mots d'origen culte, neologismes o paraules de nova creació, encara que també afecta alguns mots plenament incorporats a la llengua : *karate, cúter, waterpolo, Renfe, progre* (truncament de *progressista*), *Descartes, Hitler, idem, òpera, credo, dossier, soprano, vàter, rosbif*. Tot i això, en la mesura que aquests mots acaben plenament integrats en la llengua, augmenta la tendència a aplicar-hi la reducció, en coherència amb el que passa amb els mots patrimonials i com, de fet, ja ha passat amb noms d'origen culte com *classe, base o fase*, i amb topònims com *Londres, Brussel·les o Moscou*.”

「東部方言には、形態的文脈もしくは音韻論的文脈によって決定されてきたのではなく、一連の純粋に語彙的例外の場合がある。これらの場合、[ə] または [u] への弱化がなく、半狭母音 ([e] o [o]) となる。このふるまいは、だいたい近年に導入された語に典型的で、それゆえ一般には借用語に現れるものであるが、それには教養的な語彙、新語、造語も含まれ、言語体系に完全に取り込まれている語にも影響が及んでいる : *karate, cúter, waterpolo, Renfe, progre* (*progressista* の略語), *Descartes, Hitler, idem, òpera, credo, dossier, soprano, vàter, rosbif*。しかしながら、これらの語が言語体系に十分に取り込まれていくにつれて、従来からの語や *classe, base o fase* のような教養語、あるいは *Londres, Brussel·les* または *Moscou* のような地名に起こっていることに連動して弱化が適用される傾向が強まる」

この記述から、*karate* 「空手」のような借用後、一定の時間が経過しているものでも語末の *e* がとして [e] が残っていることがわかる。しかし、これらの例にある *Renfe* [スペイン国鉄の正式略称] は近年、実際の車内アナウンスでは語末の母音の弱化した音 [ə] で発音されていることが確認でき、記述の後半にあるように馴染んでくれば弱化が起こる傾向にあることを示している。

さらに、IEC (2019:6) も記述こそ簡潔ながら IEC (2016) と同様の傾向を指摘し、IEC (2016:44) ではあげられていなかった例を追加して掲載している。それらは、Kennedy、Newton、Egipte、doctor、complex、Homer、làser、hotel、piano で、日本語からの借用例は含まれていないものの、たとえば hotel や piano のように弱勢の o が [u] と発音されている、古くに借用され完全に語彙体系のなかに取り込まれていると容易に想像できるものがある。

このように、規範的な文法書では、借用から時間が経過し、語彙体系に取り込まれるにつれて、本来の発音ではなく、カタロニア語自体の発音方法に適応していくことがわかる。そうなるために具体的にどれくらいの時間経過が必要であるかなど詳細は記述されていないが、時間の経過とともに何らかの変化があることは予測できる。こういったことから、次項では日本語からの借用語のなかで、時間がある程度経過し、それゆえいくつかの辞書にも記載されている語の発音を確認していく。

#### 4. 調査

今回の予備調査では、発音の記載されている辞書での日本語からの借用語を調べ、弱化的状況を観察することにする。

##### 4.1. DPC (*Diccionari de pronunciació en català*)

DPC は簡易ながら、発音に関する辞書が少ないなか、発音辞典専用のものとして貴重である。2000 年発行のため、その時点で定着した語彙に限られ、地名など借用とは見なされにくいものもあるが、以下の日本語からの語が確認される。本辞書は、カタロニア語の方言形式についても発音を記述しているが、ここではバルセロナを中心とする方言の発音のみを掲載する。

- |                        |                               |
|------------------------|-------------------------------|
| ① bonsai [bunsáj] (盆栽) | ② japonès [ʒəpunés] (日本の、日本語) |
| ③ judo [ʒúdu] (柔道)     | ④ Tòquio [tòkiu] (東京)         |
| ⑤ Tokio [tukíu] (東京)   | ⑥ zen [zén] (禅)               |

④と⑤は同一の語であるが、表記のゆれが反映されている。以前は④が多く見られたが、近年は 2020 年のオリンピック関連の記述の際に⑤の綴りが

一般に用いられるようになったものと思われる。そもそも⑤はスペイン語で採用されている綴りであるため、それに追従しているとも考えられうる。なお、④と⑤で発音が異なるように記述されている点が興味深いのが、ほんとうに対応しているのかあきらかではない。

#### 4.2. DOP (*Diccionari ortogràfic i de pronúncia*)

DOP は掲載語の多い発音辞書であるため、日本語からの借用語も多く、ある程度の傾向を知ることができる。必ずしも借用語とは限らない地名なども含め、掲載が確認されたものは以下のとおりである。

- |                       |                     |                       |
|-----------------------|---------------------|-----------------------|
| ① bonsai [bunsái]     | ② caqui [káki]      | ③ harakiri [harakíri] |
| ④ ien [jén]           | ⑤ Japó [ʒəpó]       | ⑥ japonès [ʒəpunés]   |
| ⑦ judo [ʒúðo]         | ⑧ judoka [ʒuðókə]   | ⑨ kamikaze [kamikáza] |
| ⑩ karaoke [karaʃke]   | ⑪ karate [kəráte]   |                       |
| ⑫ karateka [kəɾəféka] | ⑬ kendo [kéndu]     |                       |
| ⑭ kendoka [kəndókə]   | ⑮ micaco [mikáku]   |                       |
| ⑯ quimono [kimónu]    | ⑰ Tòquio [tókio]    |                       |
| ⑱ sake [sáke]         | ⑲ tempura [təmpúra] | ⑳ zen [zén]           |

これらのうち、DPC にも記載のあるのは①、⑤、⑥、⑰、⑳であり、DPC にはあった Tokio のみエントリーされていない。個々について、その意味と発音を考察すると、③「腹切り」では、語頭の h [h] が有音との記載で、これらのなかで唯一の音声環境であるため、他の語との比較ができないが、次項で英語との比較をおこなう。⑥では、⑤とともに弱化が記載されている。⑦「柔道」は、DPC では語末が弱化した [u] になっているものの、ここでは [o] のままで、違いが生じている。⑧「柔道家」、⑫「空手家」、⑭「剣道家」では、どれも「～家」で弱化した [kə] が記載されている点が共通しており、意味的な共通項との認識が反映されていると思われる。⑨「カミカゼ」は、特に各種メディアにおいて定着して使用されているスペイン語と同様に「自爆テロ」の意味でもっぱら用いられており、本来の意味はさまざまな辞書で記載されているものの、転意された意味での使用が優勢である。⑩「カラオケ」は、おそらく 1990 年代に借用されたものと思われるが、すでに定着している様子がうかがえる。⑮は本来は「味覚」に由

来するものと思われるが、果物「枇杷」の銘柄を指すとされている<sup>4</sup>。また、綴り字が *mikako* ではなく、*-co* であるのはある程度の定着が反映されていると思われる。⑩「着物」は、他の辞書によると 1930 年代にすでに借用されていたとの記載があり、古くからの借用語であるため弱化が起こっていることがいえそうである。⑪「酒、とくに日本酒」は比較的最近の借用のようで弱化が起こっていない。⑫「天ぷら」も同様に最近の借用ながらすでに十分定着していると思われる。そのため、*e* も *a* も弱勢位置での弱化が起きているものと思われる。この語は綴り字がヘボン式の *tempura* ではない。

## 5. 考察と今後の課題

今回は、主に弱勢母音の弱化の有無を日本語からの借用語について観察したが、規範的な立場からの記述どおり、借用からの時間の経過にともなう語彙体系への取り込みが進んでいけば、原語本来の発音ではなく、カタロニア語自体の発音方法への適応も進むように見える。調査できた語彙の数が多くないため、容易な判断はできないが、時間の経過とともに借用語としての使用からカタロニア語自身の語彙体系への定着が進み、それは同時に調音の固定化をも意味すると考えられる。さらに、今回の調査では詳しくは見ていないものの、前節でみた借用語のいくつかについて、子音を観察すると、この固定化の状況が比較できるように思われる。たとえば、*h-*ではじまる語の語頭の発音について観察すると、DOP における③*harakiri* の *h-*は有音 [h] との記載があるが、英語からの借用語を観察すると、英語からのものはその定着の度合いによって、語頭音 [h] の有無が異なっているように思われる。DOP において、日本語からの語は有音である一方で、英語からの語では、借用が比較的古そうな *handball* は [ənból]、*handicap* は [əndikáp] と記載されている。英語での語源は、前者は 20 世紀前半に、後者は 17 世紀末から用いられている語であるため、カタロニア語への借用も比較的古いものと推測され、それゆえ語頭の *h* が無音になっているものと考えられる。一方、おそらく比較的最近の借用と推測される *hit-parade* [hitpəréjd] や *hobby* [hóbi] などでは *h-*が有音で記載されている。IEC が編纂する各辞書には、*handball*、*handicap* は記述があるが、*hit-parade*、*hobby* は記載されておらず、借

4 田澤耕法政大学名誉教授による調査にもとづくもの。

用の時期の差が反映されていると推察すると、定着の度合いの差として調音方法の違いが現れているといえるのかもしれない。また、地名の多くは、有音として原語の音が残っているものと Holand のように古くから知られている語で語頭の H が無音のものがあり、一様ではなく、借用の時期だけでも判断できるわけでもなさそうである。このように英語からの借用語についても観察することが必要であると思われる。

今後の課題としては、まず第一に調査する語数を増やすことである。前述した TERMCAT の新語サイトの日本食専用ページでは、翻訳された語を除き 17 語の日本語由来の語が記載されている。多くはないがそれら個々の発音を調査することによって傾向を見ることができると思われる。また、そういった借用語がいつおこなわれたか、その時期も同時に調査する必要がある。さらに、母音だけでなく、子音の調音も調査の対象とすべきで、たとえば、語頭 j- の語は、スペイン語と異なり、カタロニア語では、[ɟ] と [dʒ] が調音可能であるため、judo の語頭はこれらのいずれかの音で容易に調音されることから、スペイン語とは異なった取り込み方が観察できる。さらに、前述のように、英語など日本語以外からの借用語の発音についても観察することが必要であろう。

今回の予備的調査では、おもに母音の弱勢母音の弱化を中心に数少ない語をみただけであるが、規範的な記述に沿ったと思われる結果が得られた。つまり、借用当初の原音に近い発音からカタロニア語本来の発音様式への組み込みの変化がみられるというものである。調査語彙を増やしても、そのことに大きな変更は必要ないものと思われるが、借用の経緯を詳細に調べることで、カタロニア語の借用語受け入れの態勢をさらに明らかにすることができるものと思われる。

#### 参考文献

- Freixa Aymerich, Judit (2019) “Augment constant de manlleus en la premsa catalana: una conseqüència de la mundialització?”, *Treballs de Sociolingüística Catalana*, vol.29, pp.43-64.
- GCC=Solà, Joan et al. (ed.) (2002) *Gramàtica del català contemporani*. Vol.1. Ed. Empúries.
- IEC=Institut d’Estudis Catalans (2016) *Gramàtica de la llengua catalana*. Institut d’Estudis Catalans.

IEC = Institut d'Estudis Catalans (2019) *Gramàtica bàsica i d'ús de la llengua catalana*. Institut d'Estudis Catalans.

Paloma, David i Mònica Montserrat (2016) "La pronunciació de llatinismes i d'italianismes en el *Diccionari ortogràfic i de pronúncia*", *Estudis Romànics*, vol.38, pp.33-54.

#### 資料体

Bruguera, Jordi (1996) *Diccionari etimològic*. Enciclopèdia Catalana.

DOP = Bruguera i Talleda, Jordi (2004<sup>2</sup>) *Diccionari ortogràfic i de pronúncia*. Enciclopèdia Catalana.

DPC = Paloma i Sanllehi, David et al. (2000) *Diccionari de pronunciació en català*. Edicions 62.